ケニアの道とその周辺

工学部　地球工学科　土木コース　３回生 肥後　英志郎

今回僕らは、道直しの現場を見に、ケニアまで行ってきました。まず、この活動の概要を説明します。この活動で対象としているのは、農村の細くて整備のされていないでこぼこ道で、雨季になれば農作物を載せたトラックが立ち往生してしまうようなひどいものです。使うものは土のうとどこの家にも置いてありそうなものばかり、活動の主体は道を使う地元の人たち、とひたすらにローカルなものでした。日本の専門家たちは、やり方を教えサポートをするだけで、重機を提供したり率先して現場を指揮したりはしません。これらの条件は全て、「地元の人たちだけでいつまでも管理し続けられる道直し」を理念に考えられた末のもの、ということでした。

僕たちが現場を見に行ったときはまだ準備段階で、日本側の専門家と地元の人たちとの話し合いや現場の視察を見ることができました。今回案内してくださったのは土のうの専門家の福林さん。カウンターパートのケニア人女性とドライバーと僕ら学生 2 人をあわせて 5 人で移動しました。

最初に訪れた場所は、ナイロビから割と近い活動地区の、農業省の出先機関の事務所でした。そこでは、かっぷくのよいケニア人のおばさんと秘書らしき人が出迎えてくれました。どうやらこの女性がこの地域の農業を管轄するお役人のトップらしいです。そこで話し合う様子を横にちょこんと座って聞きました。道を直し始める日程やその他今後の活動の確認をしている様子でした。女性がこの地域の農業担当のお役人のトップであることに驚きました。日本でもあまりよくは見かけない女性の代表者。男尊女卑が依然残っていると聞いていたケニアで見かけるとは・・・。

途中、道直しの現場の住民と待ち合わせをし、車に拾ってから次に訪れたのは、住民たちが個人的に直したいと思っている自分達が普段利用する農道でした。福林さんは他の予定地に連れて行って欲しいと伝えたらしいですが、この場所に連れてこさせられました。この適当さというかマイペースさがアフリカらしいような気がしました。とりあえず、その道の近くに道直しに適した土があることを確認して次の場所へ。今度は道直しに使う土の採集場所に行きました。ここでも何かを話し合っていました。後で福林さんに伺ったら、土の採集場所まで直にトラックが入り込めるように、新たに道を整備しようか、という構想が上がったようです。

帰りの行程。カウンターパートの方が急に車を停めました。何事かと思ったら、ジャガイモ売りが道端にいて、それを買いたいとのことでした。日本では仕事中にお買い物をしてしまうと周りの目が気になってしまいそうですが、こっちの人たちはそれが当然のような振る舞いをしていました。ここまでみんながマイペースだと日本人的な感覚で時間を気にして周囲の目を気にして行動することがばかばかしく思えて来さえしました。ケニアの時間感覚は一味違っておもしろかったです。

ここまで長々と、現地で見聞きしたことを時系列に沿って書いてきましたが、それらを通して感じたことの中で特に強く心に残ったことが二つあります。一つ目は、地元の人とのコミュニケーションの大切さです。今回の見学の前にケニアでの国際協力に 20 年以上にもわたり携わってこられた喜田さんという方からお話を伺っていたのですが、どんなにすばらしい知識や能力を持っていても、地元の人たち

と話し合って地元のニーズに応えていかないと、大概は失敗してしまうそうです。今回一日の間だけ見学させてもらいましたが、その中だけでも何回も地元の人たちと専門家である福林さんは話し合っていました。国際協力とは、いままではなにか大きなことを華やかに成し遂げる漠然としたイメージしか持っていなかったのですが、実際はこんなふうに地道にこつこつと歩幅を合わせて進めていくものなのだろう、ということに気がつきました。

二つ目は英語の必要性です。現地の人たちとのコミュニケーションのほとんどが英語で行われていました。道直しの活動以外にもケニアのいろいろな場所に行きましたが、どこに行っても英語は共通の言語として通用しました。子供たちもスラムの人たちも英語で話せるのです。日本にいたらあまり危機感を感じませんが、今回の旅で日本が世界の発展途上国に次々と追い抜かれてしまう、という危機感を覚えました。もっともっと勉強をしようと思います。

道直しの活動もそうですが、観光地めぐりでない旅行からは、観光地をめぐるそれよりずいぶん多くのことを感じ取り、学べるような気がします。感性が研ぎ澄まされる感じです。この文章を読んだ人にもこのような旅をすることを強く勧めます。